

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月10日現在

機関番号：33305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820061

研究課題名（和文）近代イギリスにおける動物倫理の政治学

研究課題名（英文）Politics of animal ethics in modern Britain

 研究代表者 伊東 剛史（TAKASHI ITO）
 金沢学院大学・文学部・講師

研究者番号：10611080

研究成果の概要（和文）：

本課題により、近代イギリス都市における人間と動物の関係の重要な局面が明らかにされた。具体的には、①都市化の進行により動物を資源として活用する社会的基盤が整備される一方、②動物を道徳的に処遇すべきだという考えが広まり、③動物福祉問題の解決が迫られる中で、動物倫理と政治との密接した関係が形成されていく局面である。本研究は、この局面を複眼的に捉え、近代イギリスにおける「人間と動物の関係史」を構築することに寄与した。

研究成果の概要（英文）：

This research project has demonstrated how the politics of human-animal relations emerged and operated in modern Britain. It has shown that urban society came to exploit animals as resources and amenities, whereas animal welfare campaigners emerged to crusade against what they perceived as wanton cruelties to animals. Accordingly, the issue of animal ethics entered national politics by the end of the nineteenth century. Overall this project has contributed to the advancement of the historical understanding of human-animal relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：イギリス史、都市史、環境史、動物、動物福祉、動物倫理

1. 研究開始当初の背景

「人間と動物の関係史」は、人類史の多様な時空間の中で展開してきた両者の関係を、個々の歴史的な文脈に再定位し、総合的な視座の構築を目指す研究課題である。その目的は、特定の社会集団の動物観や、社会の中におけ

る動物の地位と役割を分析し、動物を比較対象とした人間の自己認識や、動物がその重要な構成員だった社会の歴史的変遷を理解することにある。現在、動物福祉問題への関心が高まる中で、その試みが様々な国際的プロジェクトによって進められている。例えば、西洋における事例研究を網羅した『動物の文

化史』全6巻が、2007年に刊行された(L. Kalof and B. Resl, *A cultural history of animals*, 6 vols, Oxford, 2007)。近世・近代イギリスに関して、キース・トマス『人間と自然界』(1983年)、ハリエット・リトヴォ『動物という階級』(1989年)等の先駆的研究の他に、最新の研究成果が相次いで発表されている。これらの研究は、特定の動物に付与された意味を歴史的文脈の中で分析することで、同時代人の思考と実践の枠組みを解明した(F. Palmeri ed., *Humans and other animals in eighteenth-century British culture*, Aldershot, 2006; D.D. Morse and M.A. Danahay eds, *Victorian animal dreams*, Aldershot, 2007)。今後の課題は、分析の実証性を高めつつ、個々の事例研究を発展的に統合することである。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、近代イギリス都市における人間と動物の関係を総合的に理解することである。具体的には、①都市化の進行により動物を資源として活用する社会的基盤が整備される一方で、②動物を道徳的に処遇すべきだという考えが広まり、③動物福祉問題の解決が迫られる中で、動物倫理と政治との密接した関係が生まれたことに着目する。これら3つの論点から、19世紀イギリスにおける「人間と動物の関係史」を俯瞰する視座を築きたい。

3. 研究の方法

19世紀イギリス都市においては、動物を資源と認識し、効率的に活用する社会的基盤が整備される一方、動物を道徳的処遇の対象と捉える立場から動物擁護運動が発展した。動物を資源とみなす社会経済的な制度と、動物を道徳的に処遇すべきだという認識が互いに影響を与え合いながら確立していく過程に着目し、都市における人間と動物との関係を総合的に理解することが、本研究の最終的な目的である。具体的な方法論として、次の3つの論点から明らかにする。①「動物の受容と排除」、②「動物の資源化と道徳化」、③「動物倫理の政治学」。

論点①「動物の受容と排除」

ヴィクトリア期ロンドンでは、動物が集合的に存在し、その存在が顕著だと認識される空間が再配置された。例えば、ロンドン動物園が一般公開されると、それまで観光名所だったスミスフィールドの家畜市場が公衆衛生上の問題等により郊外へ移転した。こうした特定の動物を文化的資源として受容したり、危険要素として外部に排除したりする変

化が、都市の様々な場所で連続的、相関的に起きたのである。この変化をもたらした政治的、経済的、文化的な力学と、それに伴う動物観の変容を整理することが、本研究の出発点となる。

②「動物の資源化と道徳化」

19世紀を通して、経済動物の利用規模が拡大する一方、動物は道徳的配慮の対象であるとの認識も定着した。1820年代以降成立した一連の動物虐待防止法は、家畜や馬車馬等の経済動物の保護を目的としている。科学分野でも、動物が研究対象として客体化される一方、多くの動物実験(繁殖実験)を行ったチャールズ・ダーウィンは、動物にも知性や道徳的感性があると主張した。「動物の資源化」と「動物の道徳化」の動きが、社会の諸領域において並行して進んだメカニズムを解明することが、本研究の中心的な課題となる。

③「動物倫理の政治学」

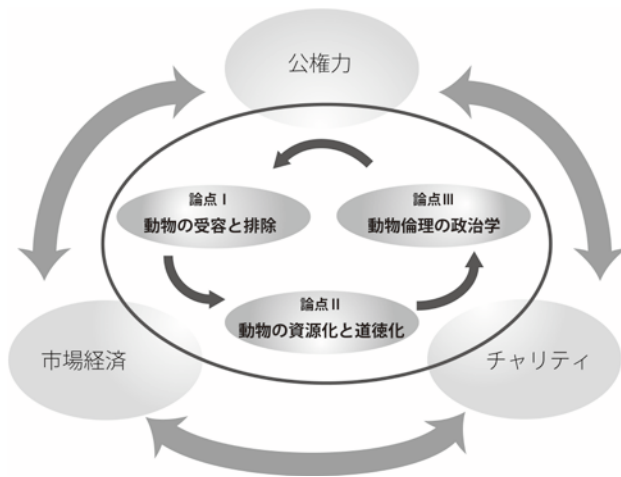
19世紀後半、動物生体解剖に対する大規模な反対運動が起こり、解剖実験が許認可制となったことは、「動物の資源化」と「動物の道徳化」との均衡関係を示している。この関係は、チャリティ団体の活動と、それに呼応する公権力とによって維持された。その結果、動物福祉の問題が政治的アジェンダへと容易に転換し、動物倫理に関する立場の表明が、直ちに政治的な立場の表明となる状況が生まれることになったのである。動物倫理と政治とが、このように直結した関係を築いた過程と、それが「動物の受容と排除」(論点I)に与えた影響を解明することが、本研究の最終的な課題である。

なお、研究計画・方法における特色として、以下の点があげられる。

1) 研究全体を構成する3つの論点(サブ・テーマ)。個々の研究課題を明示することにより、計画的に研究を遂行するだけでなく、研究全体の理論的枠組みを構築する。

2) 国内外に所蔵される多様な一次史料の発掘と体系的分析。議会、行政、法廷等の公文書から、日記や手紙等の私文書まで多岐に渡る史料を分析する。

3) 国際的な人的ネットワークを活用した研究遂行と成果発表。研究活動を通して海外研究者との交流を深め、自然環境をテーマとする比較史や関係史の発展に寄与する。



概念図

「19 世紀イギリス都市における人間と動物の関係史」

4. 研究成果

初年度は、19 世紀イギリスにおける動物福祉の法制化の展開を考察した。まず、動物虐待防止法によって最初に保護されたのが家畜であることに着目し、ロンドンのスミスフィールド市場（家畜市場）を分析対象とした。そして、議会関連史料などの分析に基づき、動物虐待防止法が、普遍的な人道的処遇の理念に基づきながら、実態としては限定された時空間と特定の社会集団を標的にしていたことを明らかにした。そして、動物虐待防止法によって摘発された動物虐待のケースが限定的でありながら、広範囲にわたる影響力をもちえた理由として、家畜虐待が安息日労働、道徳的退廃、伝染病発生などの「諸悪を結ぶ像」として提示されたことにあることを示した。一方、動物虐待防止法は、理念としての普遍性と、実態としての特殊性という矛盾を抱え、国家の統治原則に関わる問題を引き起こした。この問題が最終的に解決されたのは、19 世紀半ばに家畜市場が郊外に移転してからのことである。以上のような研究成果を、2011 年 11 月に東京大学で行われた史学会大会・西洋史部会で報告した。

また、動物虐待防止法の設立に尽力した、リチャード・マーティンに焦点をあて、彼の議会内外での活動が、同法に関する世論の形成に大きな影響を与えたことを明らかにした。この成果は、『『マーティン法』の余波-19 世紀イギリスにおける動物福祉の法制化と世論形成』として『金沢学院大学紀要-文学・美術社会学編』において発表された。

第 2 年度（最終年度）は、ケンブリッジ大学図書館等で包括的な史料収集を行う一方、ヨーロッパ国際都市史学会（2012 年 9 月プラハ）および環境史研究会ワークショップ（10 月東京）において、研究報告を行った。また、これまでの成果をもとに下記論文を発表した。① 'Locating the transformation of sensibilities in nineteenth-century London', in P. J. Atkins (ed.), *Animal cities: beastly urban histories* (Aldershot: Ashgate, 2012). ② 「満ち溢れる禽獣—動物観の変容と都市のトポグラフィ—」『金沢学院大学紀要—文学・美術社会学編』第 11 号（2013 年 3 月）。③ 「動物園と近代ヨーロッパの自然科学」『歴史と地理』231 号（2012 年 5 月）。

これらの研究成果により、19 世紀イギリスにおける長期的な動物観の変容と、その政治的、経済的、文化的な背景の一端を明らかにすることができたと考える。なお、本年度の研究成果および、そこから派生した研究の成果を、日本西洋史学会大会（2013 年 5 月京都）および ISHPSSB 国際大会（2013 年 7 月モンペリエ）において行う予定である。また、単著 *London Zoo, 1828-1859: cultural politics, public science and animal history* (Woodbridge: Boydell Press for the Royal Historical Society) の原稿完成をみた。2014 年度初頭に刊行予定である。

以上、2 年間にわたる研究により、明らかになった内容を簡潔にまとめると、次の 3 点となる。1) 19 世紀都市では、公衆衛生の拡充、食肉供給の効率化、文化産業による動物の使役により、動物を資源として活用する社会基盤が整備された。これにより、2) 動物の処遇が倫理的課題として浮上し、動物虐待防止法の制定によって、人間と動物との関係が公権力による管理と規制の対象になった。そして、3) 上記の変化のなかで、1870 年代の生体解剖論争が示すように、動物保護問題が政策課題へと転換され、動物倫理と政治との密接な関係が生まれた。このように、動物を資源化する制度と、動物の人道的処遇を定める規範とが、政治的な相互干渉を繰り返しながら確立していく、ダイナミックな過程が明らかになったのである。

今後の課題は、19 世紀イギリスの動物倫理に関する種々の変化が、「動物愛護の先進国」誕生へと結実する過程を批判的に考察することである。つまり、19 世紀から 20 世紀初頭のイギリスにおいて、動物福祉の制度と理念がどのように構築されたのかを解明することが、重要な課題としてあげられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①伊東剛史「満ち溢れる禽獣—動物観の変容と都市のトポグラフィー」『金沢学院大学紀要—文学・美術社会学編』11号 (2013年3月) 236-246頁 査読無

②伊東剛史「動物園と近代ヨーロッパの自然科学」『歴史と地理』231号 (2012年5月) 55-58頁 査読無 (依頼)

③伊東剛史「『マーティン法』の余波—19世紀イギリスにおける動物福祉の法制化と世論形成」『金沢学院大学紀要—文学・美術社会学編』10号 (2012年3月) 227-242頁 査読無

[学会発表] (計 3 件)

①伊東剛史「象の涙—ダーウィン『人間と動物の感情表現』をめぐる考察」(環境史研究会、2012年10月、於東京大学)

②T. Ito, 'The 'charm of novelty': the restructuring of the London Zoo and the cultural industries in mid-nineteenth-century Britain', 11th International Conference on Urban History, August-September 2012, Prague, Czech Republic

③伊東剛史「19世紀イギリスにおける動物虐待防止法の成立とロンドンの時空間秩序」(史学会大会・西洋史部会、2011年11月、東京大学)

[図書] (計 2 件)

①T. Ito, *London Zoo, 1828-1859: cultural politics, public science and animal history* (Woodbridge: Boydell Press for the Royal Historical Society, 2014) 査読有

②P.J. Atkins (ed.), *Animal cities: beastly urban histories* (Aldershot: Ashgate, 2012) 第7章 T. Ito 'Locating the transformation of sensibilities in nineteenth-century London' (pp. 189-204) 分担執筆 査読有

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/tkito>

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊東剛史 (TAKASHI ITO)

金沢学院大学・文学部・講師

研究者番号: 10611080